

1986.7.12  
ISSN 0912-2912



商務印書館研究はどうなっているか

沢本 郁馬



00

商務印書館研究という分野があるかどうか、私は知らない。なければ、なに、作ればよいのだ。商務印書館に関して書かれた文章で、その後、私の眼に触れたいくつかを紹介してみたい。私が、関心をもっている商務印書館と金港堂の合併問題を含めた初期商務印書館に的をしぼって見てゆく。

01

まず、朱蔚伯「商務印書館是怎样創辦起来的」（『文化史料（叢刊）』第2輯1981.11）からはじめよう。

商務印書館の創立者は、鮑咸恩、夏瑞芳、鮑咸昌、高翰卿、郁厚坤、張蟾芬らだが、夏瑞芳と鮑咸恩のふたりが最初の発起人だ、というところから記述が、こまかい。鮑咸恩の弟は、咸昌、咸亨の順になるという。夏瑞芳、鮑咸恩と高翰卿（鳳池。美華書館に勤務）は、基督教長老会が経営する清心堂の同級生だった。彼らは、光緒二十二年三月初三日（1896

★清末小説研究会 JAPAN  
〒520滋賀県大津市打出浜8番4-504 樽本照雄方★

# から

# 清末小説

1986. 8. 1

商務印書館研究はどうなっているか  
………沢本郁馬 1  
劉鉄雲の初来日………樽本照雄 8  
顔廷亮作清末小説理論研究論文目録12/  
清末小説から11  
★清末小説に関する研究と情報交換を編集の二本柱とする。事実の掘り起こし、資料の発掘と紹介を重視したい。投稿歓迎(四百字詰10枚以内)。次号は10月発行

年4月15日)をえらんで会合し、資金を集めることにする。

資本金3750元の内訳は、次のとおり。

- |              |             |
|--------------|-------------|
| 沈伯芬 2株 1000元 | 徐桂生 1株 500元 |
| 鮑咸恩 1株 500元  | 高翰卿 半株 250元 |
| 夏瑞芳 1株 500元  | 張蟾芬 半株 250元 |
| 鮑咸昌 1株 500元  | 郁厚坤 半株 250元 |

筆頭株主の沈伯芬は、電報総局の天主教徒で、張蟾芬はその同僚。夏瑞芳の五百元は、夏夫人が女友達から借り、鮑咸昌の半分は、高翰卿から借入した、というところまで書いてある。

商務印書館の創立は、1897年2月11日（光緒二十三年正月初十日）である。

1900年、商務印書館は日商修文印書局を買収した。それは、印錫璋の紹介によるものだという朱蔚伯の指摘は、重要だ。1901年、印錫璋は張元濟とともに商務印書館に投資し株主となるが、修文印書局の件がそのキッカケとなったのではなからうか。印錫璋は、紡績工場主だったから、三井物産上海支店長として紡績事業に従事していた山本条太郎とは懇意の間柄である。山本条太郎の岳父は、金港堂の原亮三郎だ。印と山本の周旋で、商務印書館と金港堂の合併がなる、という筋書きを、朱の証言が強化してくれている。

商務印書館と金港堂の正式合併が1903年だというのは、ほかの資料にも書いてある。しかし、11月19日（陰曆十月初一日）であることは朱蔚伯の文章で、はじめて知った。

原亮三郎が、小谷重と加藤駒二を伴い神戸から上海にむかったのが1903年10月11日のことだ。10月15日、上海に到着。合併の話を煮詰めるのに約1ヵ月かかったことになる。長尾楨太郎（雨山）が、同じく神戸から上海へ旅立ったのが12月2日。両書店合併後だ（『清末小説研究会通信』第24号1983.1.1、第38号1985.7.1参照）。

朱蔚伯は、商務印書館の「編訳所職員録（1903-1930）」を見ている。私も拝見したいものだ。1909年3月、董事（理事）局を設立し、日本側からは加藤駒二と長尾楨太郎が列なった。編訳所には、さらに「中島端（号は復堂）、太田政徳（号は母山、愛知県師範校長）」の名前があげられている。

太田政徳の職業と時期からピンとくるものがある。早速、資料ファイルをさがす。想像したとおり、教科書疑獄事件で拘禁されていた（『大阪朝日新聞』明治36年2月16日付）。太田も長尾、小谷、加藤らと同じ道をたどったと思われる。

商務印書館における日中の人間関係は、悪くはなかったようだ。翻訳して引用する。「彼ら（注：日本人関係者）は、みな漢文に精通した教育家や漢学者であった。日本人の専門家、顧問は、生活は比較的つつましく、主客の間の交際はかなりうまくいっていた。彼らは、商務に彼ら自身なりの貢献をしていると考えていたので、若い労働者が技術を学ぶよう真剣に指導することが出来たのだ。技師の給料は、一般に80元から180元まで（木本<勝太郎>は技師長なので月俸は180元）だが、加藤、長尾の給料はふたりとも200元だった」

長尾雨山は、金港堂と商務印書館が合併していた期間、11年間を中国で過ごした。人間関係がうまくいっていなければ、11年という長い時間を商務印書館で送ることはできないのではあるまいか。

商務印書館が金港堂との合併を解消す

るにあたり、金港堂側の代表者として福間甲松の名がでている。合併解消の調印が行なわれるのが1914年1月6日だといふのとあわせて、初めて知ることだ。商務印書館が金港堂に支払った金額は、約58万8200元だったという。

細かな数字までもあげ、詳しく述べられているところから、内部資料を使っていると思われる。教えられるところが多い。朱蔚伯は、商務印書館関係者ではなからうか。本論文は、重要文献のひとつだ。

02

高嵩「商務印書館今昔」（『出版史料』第1輯1982.12）は、合併問題に軽く触れる程度。夏瑞芳が中国の印刷事業を振興するために、外国の先進技術を導入することから着手し、日商との合資経営を辞さなかった、ということになっている。あくまでも、夏瑞芳が主導権をにぎって、外資を利用し、近代印刷技術を導入、そうして先進設備をそなえた後は、ただちに外商を断絶した、とする。金港堂、あるいはその関係者の名前は出てこない。商務印書館が合併解消をせざるをえなくなった歴史的背景、すなわち辛亥革命という政治社会状況の変化を考慮していない。「外資利用説」は、合併問題に触れる中国の文章に多く見られる立論だ。

汪守本「愛国出版家張元濟」（『人物』1982年第4期1982.7）、賈平安「商務印書館与自然科学在中国的传播」（『中国科技史料』1982年4期初出未見。『新華



文摘』1983年3期1983.3.25)には合併問題への言及がない。また、『出版史料』第2輯(1983.12)に掲載されたいくつかの回憶録、すなわち葉聖陶「我和商務印書館」、楊蔭深「在商務印書館的十八年」等は、時期的なズレがあつて、これらにも合併に関する発言はない。書かれる目的が違うのだからしかたがない。まあ、商務印書館についての文章がある、というだけで……。

03

王紹曾の『近代出版家張元濟』（北京商務印書館1984.11）には、核になる文章があつたらしい。張元濟の古書整理出版について書いたその論文をもとにする。分量からいうと、それが該書の約6割を占める。修正は商務印書館の汪家燊が担当したと後記に書いてある。

家系と生涯、近代出版事業の開拓者、戊戌新文化運動から五四前後まで、古書の整理出版という4章にわけ、張元済の人となりと業績が述べられる。

ところが、金港堂と商務印書館の合併については触れていない。張元済が商務印書館に入ってから、小学教科書を編集するにあたり、特に日本人長尾楨太郎と小谷重を招へいし、顧問としたことだけが書いてある(23-24頁)。それも、楨太郎を楨太郎に誤っているのだ。

たしかに、張元済について記述することを目的にしたのが本書である。商務印書館に関しては副次的になるのはやむをえないかもしれない。しかし、王紹曾自身がのべているように、「彼(張元済)は、商務創業の元老であり、編訳所の基礎を定めた人である」(138頁)。張元済と商務印書館は切ってもきれない関係にある。その11年間を合併していた相手の金港堂について、少しは言及があってもいいのではないか。汪家燊がついていながら、この結果である。残念なことだ。

04

利波雄一「李伯元と商務印書館」(早稲田大学『中国文学研究』第10期1984.12)は、初期商務印書館にふれつつ、李伯元と『繡像小説』の関係を洗いなおしている。汪家燊が通説を否定して、李伯元は『繡像小説』の編集者ではないと主張した(汪家燊「商務印書館出版的半月刊一『繡像小説』」『新聞研究資料』総第12輯1982.6、「『繡像小説』及其編輯人」

『出版史料』第2輯1983.12)。これをにらみながら、利波雄一は、次のように結論する。「『繡像小説』は翻訳小説を中心とする翻訳読物は商務印書館編訳所、その他小説を中心とする創作は李伯元、そして全体の編輯はやはり商務印書館編訳所がそれぞれ担当していたのではないかと思われる。」新しい見方である。編訳所の組織、人員、活動等の実態が明らかにされると、より一層の説得力が獲得できるのではあるまいか。また、李伯元の死後も『繡像小説』は発行されている。私としては、創作担当は李伯元、という箇所、協力者である歐陽鉅源を加えたい。補記がある(利波雄一「『李伯元と商務印書館』補記」『中国文芸研究会会報』第53号1985.6.30)。

『繡像小説』が出てくると、合併問題とのからみで、中村忠行「清末文学研究時評」(『中国文芸研究会会報』第54号1985.7.30)をはずすわけにはいかない。

中村忠行は、上海商務印書館と中国商務印書館のふたつがあることに注目し、『繡像小説』は金港堂が発行したものだとする。「『繡像小説』は、全く原亮三郎個人の考えで創刊され、原自らの判断で廃刊されたのである。」これが、結論だ。ウーム。うなってしまった。いかにも、ありそうな話だ。『繡像小説』の刊行が遅れていたという新説がある(張純『晚清小説研究通信』1985.4.17、7.17。樽本照雄「『繡像小説』の刊行時期」『中国文芸研究会会報』第55号1985.9.30)。中村忠行が該文で展開した李伯元と劉鉄

雲の確執説は手直しをせざるをえまいが、『繡像小説』金港堂発行説が当たっているとすると、おもしろいことになる。

利波雄一のいう、『繡像小説』の創作は李伯元、全体の編集は商務印書館編訳所という説に、中村忠行の、『繡像小説』発行は金港堂だ、というのを重ねるとどうなるか。

まず、商務印書館編訳所に、長尾慎太郎を中心とした、加藤駒二、小谷重、中島端、太田政徳らの日本人グループが存在していたという事実注目しないわけにはいかない。そうすると、『繡像小説』は、原亮三郎の意を受けた商務印書館編訳所の日本人および李伯元と歐陽鉅源の、ふたつのグループが共同して動かしていたと考えることが出来る。利波説と中村説は、ピタリとかみあうのだ。

事実が知りたい。ここは、中国側からの、資料に基づいた反論を期待したいところだ。

05

汪家燊『大變動時代的建設者』（四川人民出版社1985.4）は、扉を見てはじめて「張元濟伝」であることが知れる。8頁にわたって巻頭を飾るのは、張元濟と関係著作の写真だ。本文を読めば、張元濟を中心にすえて、同時に商務印書館史ともなっていることがわかる。表紙に著者・汪家燊の名が見えないのは、編集の誤りか、あるいはこの「走向未来叢書」の方針なのか。

本書は、張元濟に関して流布する逸話



を、資料に基づいて正す目的で書かれた（後記）。全20章の本文には、各章のかわりに主要引用材料があげられ、巻末には11頁にわたる引用書目がつく。まず、その材料の豊富さに目を見張る。張元濟と商務印書館に言及した文章を、単行本、雑誌、新聞から博搜しているのだ。中国語（台湾、香港を含む）のほかに、日本語、フランス語、英語の文献までが列挙される。公表された文章ばかりではない。関係者の談話記録、談話テープ、商務印書館株主会記録、理事会会議録、商務印書館館史資料、張元濟の手紙などの内部資料もふんだんに使われる。商務印書館に勤務する汪家燊にしてはじめてできることだ。それだけに読みごたえがある。

たとえば、『外交報』だ。『外交報』は、汪家燊も引用するように、「清季重要報刊目録」、張静廬「出版大事年表」

あるいは商務印書館自身が出した大事記には、商務印書館が創刊出版したものと書かれている。ところが、1982年に発見された株券、「外交報社庚戌年結賬清單」を材料に、『外交報』は、張元済が主宰する独自の機構で、商務印書館は投資者のひとつにすぎないことを明らかにした。

これは重要だ。商務印書館の公的記録ともいべき大事紀要に、その創刊をうたわれている『外交報』でさえ、その実態は、張元済が創刊した別個の刊行物だという。そうなれば、奥付(表三)に「総発行所 上海棋盤街中市商務印書館」と刷り込んであるが、商務印書館の大事紀要にはその誌名をはずされている『繡像小説』が、金港堂すなわち原亮三郎の出资で発行されていたとしても、不思議ではない。中村忠行説が成立する可能性は、充分にある。

張元済が商務印書館に参加した経緯について、五十年來の「謬見」があるのだそう。汪家燊は、それをどのように正したか。

「謬見」とは、こうだ。夏瑞芳が時流に応じ、日本語からの翻訳物を出版しようと訳稿を買い入れた。いくつか出版したが売れない。夏瑞芳はいぶかって、面識のある張元済に訳稿と出版物を見せると、訳文がでたらめであることがわかった。南洋公学訳書院に改訳をたのんだが完成しない。経営不振におちいった商務印書館は、外部からの投資をおおぐことにし、張元済がそれに応じた。また、

夏瑞芳が張元済に編訳を主宰してくれるようにたのんだ時、張元済はたわむれに南洋公学訳書院の月俸は350元だが、商務印書館に出せるかと問うた。夏瑞芳がすかさず承諾したので、張元済はことわることができなくなった、というエピソードを添える(47-48頁)。

これらの「謬見」をまきちらしているのは、引用書目を参考にすると、林熙、『文史資料選輯』、蔣維喬、王雲五、沢本郁馬および前出朱蔚伯である。ただし、朱蔚伯は、350元エピソードで否定的に引用されるだけで、引用書目に朱の名前はない。

汪家燊が非難するのは、いずれもが具体的な資料を提出していないということだ。全部否定をしている。蔣維喬、王雲五(それに朱蔚伯を加えてもいいと思う)らは、商務印書館に勤務して張元済を知る人たちだ。その証言だからこそ、私は注目したのだが、そういうものか。

張元済が商務印書館に入ったのは、教育を普及させるために出版を選択したため、主導権を握っていたのは、夏瑞芳ではなく、あくまでも張元済の方だ、と汪家燊は主張する。張元済は上海で資金を集め出版を行なう意志を持っていた。1901年四月二十五日、嚴復が張元済にあてた手紙が証拠だと、それを出す(53-54頁)。しかし、夏瑞芳が張元済に投資をたのんだから張元済が資金を集めようとしていたのかも知れないではないか。前後関係が明らかにされていない。

張元済は、英語はできたが、日本語は

理解しなかった。だから、日本語原文とその翻訳を対照することはできない、と汪家燊はいう(56頁)。日本語原文といちいち照らしあわせたのではないと私も思う。その限りで、汪家燊は正しい。しかし、それをもって張元済が中国語の訳稿を見なかったと拡大解釈することはできない。朱蔚伯は、訳稿を張元済に点検してもらった、と書いているだけだ。張元済ほどの人であれば、訳稿を読むだけでそれが使いものになるかどうか判断できるであろう。カス原稿をつかんだ夏瑞芳が、自前の編訳所を持つことの必要性を感じ、具眼の士として張元済に白羽の矢をたてたという経緯の方が納得しやすい。

汪家燊は、商務印書館には経営不振の事実はないという(57-58頁)。張元済が商務印書館に投資したのは、出来合いの機構と夏瑞芳らの経営人を、自らの理想のために利用しようとしたため、夏瑞芳が欠損を出すような人間だとしたら協力しようとはしないだろうし、投資などさらに言うまでもないのだそう(58-59頁)。これでは、まるで、「封建等級社会で、張元済と夏瑞芳の間に大きな等級差別が存在」(54頁)するのをカサにきて、張元済が自らの教育普及という理想のために、夏瑞芳の経営する商務印書館を乗っ取った、という印象を与えかねない。張元済はそういう人物だったのか。「張元済は、きわめて心のさっぱりして、無欲で、強情な人である」(48頁)と汪家燊は張元済の人となりを描くが、

それと矛盾しないか。

350元のエピソードは、まさに、張元済がたわむれに言っただけのことだ。夏瑞芳が張元済をそれほど高くかっていたことを示す例として、朱蔚伯はこの逸話を紹介している。張元済が商務印書館に移ったのは、その金額が理由だなどと朱は書いているわけではない。汪家燊の誤解ではないか。

長尾楨太郎は、商務印書館の顧問にすぎなかったとあるが(72頁)、「編訳所職員録」にそう書いてあるのだろうか。長尾は、商務印書館においてどういう役割を果たしたのか、詳しく知りたいところだ。

商務印書館と金港堂の合弁の経過(81頁)については、樽本照雄「金港堂・商務印書館・繡像小説」(『清末小説研究』第3号1979.12.1)、および「商務印書館と山本条太郎」(『大阪経大論集』第147号1982.5.15)を参考にしている。樽本は、印錫璋の依頼を受けた山本条太郎の周旋で両書店の合弁がなったとする。ところが、汪家燊の記述では、印錫璋が姿を消す。さらに、金港堂は教科書疑獄事件で出獄した人々を按排するため、中国に投資することにし、山本に調査を行なわせたと書いている。何によったのか。これは正しくない。

本書が豊富な資料をもとにして書かれた、はじめての本格的な張元済伝——商務印書館史である事実には変わりがない。ただ、論述の方法として、否定するために引用するという著者の書き方は、なに

かムキになっているような姿勢がうかがわれ、ほほえましい。

気のついた誤植をあげておく。実藤恵秀は実藤が正しい(60頁)。映雪書院ではなく、螢雪書院(60、299頁)。陸費逵の姓は、陸ではなく、陸費という複姓である(153頁)。樽本照雄《商務印書館和山本条太郎》天理大学学教は、大阪経大論集の誤り(299頁)。同じく《金范堂・商務印書館・繡像小説》は、金港堂の誤植(同上)。

06

東京に行ったおり、東洋文庫で、『商務印書館図書目録』2冊を見かけた。その足で神田の中国書籍専門店をたずね、在庫の有無を聞いたが、入荷していないという返事だ。よくよく聞いてみると、該書は発行されたが非売品であるという。さいわい、阪口直樹氏が所有されており、1897-1949年部分を見せてもらった。発行は1981年。総類、哲学、宗教、社会科学、語文類、自然科学、応用技術、芸術、文学、史地にわけられた分類目録だ。それに、叢書総目録(これも分類され、文学の項目には、当然、説部叢書、林訳小説叢書が含まれる)と付録がつく。便利ではある。しかし、最大の欠点は、発行年が書かれていないことだ。これでは、ただ、こんな本を1897-1949年の間に出版しましたよ、というだけのことにすぎない。せつかくまとまった貴重な資料であるのに、かえすがえすも残念である。☹

★—————★

## 劉鉄雲の初来日

樽本照雄

★—————★

1906年、劉鉄雲は、2度、日本を訪れている。劉鉄雲が残した詩集、すなわち「東遊草」を根拠とする。

「東遊草」を含める劉鉄雲の詩は、劉蕙孫によってまとめられ、注を施し『鉄雲詩存』と題して出版された。済南齊魯書社1980年12月発行。1983年1月の再版本がある。

劉蕙孫は、劉鉄雲の孫にあたる人物だ。現在、福建師範大学歴史系教授。1984年、私の天津滞在中、氏は、福建からわざわざ宿舎を訪問下さったことがある。感激した私は言葉もなかった。

『鉄雲詩存』の劉厚滋(蕙孫)注によれば、「東遊草」はすべて光緒三十二年(1906)、劉鉄雲が日本に赴いたときに作ったものだという(『鉄雲詩存』42頁)。

詩の題に込められた日付を見ると、最初の来日は旧暦正月、2度目は同年八月となる。

劉蕙孫の説明にしたがい、初来日を詩題のままにならべる。カッコ内は、陽暦の日付。



二月

# 旋 (佐世保)

八隊長宮下少佐  
日四十名は十一  
より要塞營所迄  
賦業者を以て充  
て飾り其の盛  
りす將卒は海軍

軍樂隊に迎へられ一應營所に入り市中に宿泊す

● 觀光清人 道臺烈鐵雲氏は觀光の爲昨

十一日上海より來着今朝奈良に向つて出發せり京都に一泊し明日東上の筈同氏は嘗て

北京シンヂケイト(福公司)の總辦たりしてとあり清國事業家の一人にして在清國本邦

人とは交遊最も廣く本邦人にして同氏の家に寄食し居たるもの影からす同氏は又有名なる藏書家にして金石に通じ所藏古銅器、骨董品、古書書類の如き人目を驚かすに足るもの多し同氏は留學の爲今回二人の令息をも伴ひ來れり

● 紀元節 十一日午前九時大阪府廳にて

を伴ひ來れり

光緒三十二年 (明治39年、1906年)

- 正月十四日 (2.7) 夜 長崎着
- 十五日 (2.8) 茂木に遊ぶ
- 十六日 (2.9) 四国九州を過ぎる
- 十七日 (2.10) 神戸着、布引の滝
- 十八日 (2.11) 奈良着、春日神社
- 十八日 (2.11) 大阪泊、恵比寿橋丸万館
- 十九日 (2.12) 西京清水寺
- 二十日 (2.13) 嵐山
- 二十四日 (2.17) 口号
- 日付なし 吉原
- 日付なし 新橋
- 日付なし 紅葉館

「十八日 (2.11) 大阪泊、恵比寿橋丸万館」というのは、戎橋の丸万料理店のことか。紅葉館は、明治13年に創業した料亭。東京芝公園内にあった。

見れば、長崎から、関西、関東へと、急ぎ足で名所旧跡を歴訪する旅と知れる。劉鉄雲がよんでいる「二十四日口号」には、「半ばは名勝に遊び、半ばは見物」という表現がある。なんのことはない、全部が観光ということだ。

劉鉄雲の来日目的を考える場合、彼のこの表現を重視すべきだ。というのは劉蕙孫(『鉄雲先生年譜長編』 濟南齊魯書社1982.8. 134頁)と汝良(『『老殘』遊日本』『文学報』第140期1983.12.1)である。

異論がないわけではない。蔣逸雪は、『劉鉄雲年譜』(魏紹昌編『老殘遊記資料』北京中華書局1962.4. 采華書林影印

『大阪朝日新聞』明治39(1906)年2月12日

知事代理平  
ては山下市  
の他各官公  
内諸學校に  
へて遠拜式  
を執行せり  
開校棉花選

日記文章 20頁外、0頁、5頁、10頁、15頁、20頁、25頁、30頁、35頁、40頁、45頁、50頁、55頁、60頁、65頁、70頁、75頁、80頁、85頁、90頁、95頁、100頁  
1875-1924 8, 115頁  
1903年 大阪府立総合資料館、205号館蔵、205号館蔵、205号館蔵

本。181頁。また、蔣逸雪『劉鶚年譜』(濟南齊魯書社1980.6. 48頁)で、劉鉄雲の訪日について次のように言う。「本年、2度訪日しているが、その意向は不明。ある人は精製塩を売りさばくためだとか、古物を売るためだとかいっているが、いずれが正しいか知らない。」いろいろな意見があるものだ。

このたび、上に見る劉鉄雲の初来日を証明する新聞記事を見つけた。以下に紹介する。ルビは省略。

『大阪朝日新聞』明治39年2月12日

欄外記事

●観光清人 道台劉鉄雲氏は観光の為昨十一日上海より来着今朝奈良に向つて出発せり京都に一泊し明日東上の筈同氏は嘗て北京シンヂケート(福公司)の総弁たりしことあり清国事業家の一人にして在清国本邦人とは交遊最も広く本邦人にして同氏の家に寄食し居たるもの尠からず同氏は又有名なる蔵書家にして金石に通じ所蔵古銅器、骨董品、古書画類の如き人目を驚かすに足るもの多し同氏は留学の為今回二人の令息をも伴ひ来れり

劉鉄雲は、上海から長崎に到着。長崎から船に乗って神戸に着いた(ン?!)。大阪に移動してきたところを朝日の記者が取材したらしい。そのあと、劉鉄雲らは奈良の鹿と遊び、大阪に引返し戎橋の丸方に宿泊した、ということになるうか。朝日の記事と、詩にうたわれた日程は、一致する。

来日の目的も、観光であることが証明された。

朝日の報道で、「同氏は留学の為今回二人の令息をも伴ひ来れり」という箇所が、私の目を引く。初耳である。劉鉄雲の子息で日本留学をした人物となると、劉大神の名がすぐ浮かんでくる。

＜劉大神 1886-x 字は季英、日本に留学して京都帝国大学文学部出身。其の著に「貞観学易」「女真訳語質疑」があり、皆未刊である。其の既刊に「最新養蜂法」(商務印書館出版)

橋川時雄『中華文化界人物総監』中華法令編印館1940.10.25. 669頁＞

劉鉄雲に連れられてきた一人が劉大神とすれば、彼が二十一歳のときだ。ついでに言えば、劉大神の長男が、ほかでもない劉蕙孫である。

新聞記事には、二人の令息とある。もうひとり誰なのか。待考。 ㊦

樽本照雄著

## 清末小説きまぐれ通信

清末小説に関するコラム51。『清末小説研究会通信』の6年分を集める。ご希望の方は、200円分の切手を同封のうえ下記までお申し込み下さい。

——清末小説研究会——

日本〒520滋賀県大津市打出浜 8番4-504  
樽本照雄方 郵便振替 大阪9-40475

清末小説から 分類目録を作るためのカードがたまっている。整理して『清末小説』に掲載する予定だ。ここでは最近のものを分類せず随時載せていく。中国語音のABC順

浜下武志○『申報』影印版の刊行について (東大東洋研) 『センター通信』第26号1985.11

方山○李伯元確曾編輯《繡像小説》「文学遺産」第692期『光明日報』1985.10.22

郭豫適○要重視近代資産階級革命派小説研究——評《自由結婚》及其他 『中国古代小説論集』上海華東師範大学出版社1985.1

Lancashire, Douglas○A note on Chapter 59 of the Wen-ming Hsiao-shih AUSTRINA 1982

盧叔度○<輯校>『我仏山人短篇小説集』広東花城出版社1984.9

毛徳富○<編校>『苦社会 黄金世界』中州古籍出版社1985.2

芮和師など○<編>『鴛鴦蝴蝶派文学資料』上下冊 福建人民出版社84.8

時萌○曾樸与日本詩人的文字縁 『光明日報』1985.10.8

汪家榕○『大變動時代的建設者』四川人民出版社1985.4 張元濟伝 ○李伯元と劉鉄雲はどちらがどちらを盗用したのか 『中国文学研究会会報』57号1986.1.30

魏紹昌○『鴛鴦蝴蝶派研究資料』上巻

史料部分、下巻作品部分(呉承恵と共編)上海文芸出版社84.7  
○『牡丹伝奇』福建人民出版社1984.8

WONG, Timothy C. ○NOTES ON THE TEXTUAL HISTORY OF THE LAO TS'AN YU-CHI T'ung Pao(通報)LXIX.1-3, 1983

夏志清○《玉梨魂》新論 上・中・下 『明報月刊』237~239期1985.9 ~11 <歐陽子訳>

興膳宏○魯迅初期の翻譯小説 『魯迅全集第13卷(月報第7号)』85.4

葉易○『中国近代文芸思想論稿』復旦大学出版社1985.1

斉藤泰治○張恨水の『八十一夢』について——並びに張恨水の伝記ノート 『法政大学教養部紀要』第53号 1985.1

章培恒○《海上花列伝》与其以前的小説 江蘇省社会科学院文学研究所編『明清小説研究』第1輯85.8に再録

張純○關於《老殘遊記》外編殘稿的写作時間 『徐州師範学院学報』(哲学社会科学版)1984年第3期 1984.9.15

鄭方沢○略論晚清文学改革運動的發展和成就 『社会科学戰線』1985年第2期(總第30期)1985.4.25

中村忠行○日中文学交流の一視点 SINO-JAPANESE CULTURAL INTERCHANGE : ASPECTS OF LITERATURE AND LANGUAGE LEARNING Papers of

the International Symposium  
on Sino-Japanese Cultural Int-  
erchange Vol.2 The Chinese  
University of Hong Kong

中島利郎○徐枕亞と『玉梨魂』 『野草』  
第36号1985.10.31

鍾賢培○時代的、民族的詩魂——中国  
近代愛國詩歌略論 『社会科  
学戰線』1985年第2期(總第30期)  
1985.4.25

莊月江○樽本照雄与清末小説研究会  
『文芸情況』總112 1985.8.23  
○劉鶚与上海 『芸術館』1985.  
9-10合刊

樽本照雄○阿英編「近百年来国難文学大  
系」 『中国文芸研究会会報』  
56号1985.11.30

○「老殘遊記」と「文明小史」  
の盗用關係を論じる 『中国文  
芸研究会会報』57号1986.1.30

---

文史知識 1984年第9期(總第39期)  
近代專号 1984.9.13

---

關於近代文学研究的我見……………任訪秋  
近代文学中的尚武精神……………趙慎修  
《老殘遊記》是一部什麼樣的書…嚴薇青  
為救亡圖強而呼号……………鍾賢培  
不懂外文的翻譯家——林紓……………孔立  
什麼是鴛鴦蝴蝶派……………劉揚体

---

顏廷亮作清末小説理論研究論文目錄

---

晚清小説理論研究中的一個問題 『甘肅

師大學報』1980年第2期1980.6.25  
晚清小説理論發展新階段的一個標志  
『西北民院學報』1981年第1期81.2.  
23

晚清革命派小説理論中的藝術性問題  
『(甘肅)社会科学』1981年第2期81.  
5.25

晚清革命派關於小説政治方向問題的理論  
『蘭州大學學報(社会科学版)』1981  
年第4期1981.11.28

晚清革命派小説理論的歷史地位 『蘭州  
大學學報』1983年第4期83.10.28

略談晚清革命派的小説理論 「文学遺產」  
第573期『光明日報』1983.2.8

晚清革命派小説理論中的小説遺產問題  
『(甘肅)社会科学』1984年第5期84.  
10.25

晚清革命派和我国小説理論的近代化  
『甘肅教育學院學報』1985年第1期  
1985.6

《小説林》的小説理論 『貴州社会科学』  
(文史版) 1985年第7期85.10.20

---

清末小説第8号 1985.12.1

ワクドキ清末小説……………沢本香子  
吳研入「電術奇談」の方法…………樽本照雄  
《老殘遊記》外編及“三集”…高健行  
孫次舟本『孽海花』について…神田一三  
晚清小説大系『老殘遊記』の素性  
…………樽本照雄

樽本照雄『清末小説閑談』索引

…………清末小説研究会

---